

## 英国人記者が見た連合戦勝史観の虚妄

JJ1SXA/池

石川弘修氏が「日本の立場を守るのは日本人自身だ」として、次の書を紹介している…先月発行された祥伝社新書/ヘンリー・S・ストークス著「英国人記者が見た連合戦勝史観の虚妄」。

内容は、(1)英人記者が戦勝史観を排撃、(2)戦死者の崇敬は国家の義務。…以下、石川氏抄訳記事の抜粋を引用…

東京裁判(極東国際軍事裁判)の「日本＝戦争犯罪国家論」や「南京大虐殺」の発生を単純に信じ、何らの疑いもなかった。だが、20世紀の日本とアジアの歴史を俯瞰したとき、そうした見方が大きな誤りであることに気付いた。

例えば、①先の大戦は日本の安全保障のための自衛戦争だった(マッカーサー連合軍最高司令官の議会証言)②日本国憲法は日本を弱体化し、二度と戦争を起こすことが出来ない国にする降伏条約だ③日本が自国の歴史と伝統のうえに立って自主憲法を制定し、国軍を持たなくては日本が独立国家となることなどあり得ない。

戦後、占領軍には靖国神社を軍国主義の象徴として焼き払うという意見もあったが、マッカーサー元帥に対しローマ法王庁駐日臨時代表ブルーノ・ビッテル神父が「戦勝国か敗戦国かを問わず、国家のために命を捧げた人に敬意を払うのは自然の法であり、国家にとって義務であり、権利でもある」と助言したため、神社は難を逃れた。同神社の境内にビッテル神父の像を建てれば、米国、カナダ、オーストラリアや、欧州諸国などキリスト教圏で、靖国神社がよく理解されるだろう。

「慰安婦問題」など歴史問題のほとんどは、日本人側から中国や韓国にけしかけて問題としてもらったのが事実だ。

日本は相手の都合を慮ったり、阿諛追従する必要はない。アメリカはアメリカの立場で、中国は中国の立場で、日本は日本の立場でものを言う。当然それらは食い違ふ。だが、それでいいのだ。世界とはそういうものである。日本だけが物わかりのいい顔をしていたら、たちまち付け込まれてしまう。日本以外に誰が日本の立場を守ってくれるだろうか…引用終り…

そして、石川氏は「ストークス氏の著書が英語でも刊行され、世界で幅広く読まれることを切に願う」と結んでいる。

ヘンリー・S・ストークス氏は、米ニューヨーク・タイムズ紙などの東京支局長を務めたベテラン英国人ジャーナリストである、戦勝国によって強いられた歪んだ歴史観を正しているのが日本人では無いというのが素晴らしい。

(19.Jan,2014 記)